

西来寺報

二〇一五年 秋
第十九号

蓮の花が咲きました。

西来寺の中庭の池に蓮の花が咲きました。今年の3月頃に植木屋さんに仕込んで頂いた蓮が生長してこのたび花をつけました。

蓮の花はインドでは特に高貴な花として珍重されていますが、仏教でも仏さまの台座に使われていたりします。親鸞聖人も正信偈の中で、阿

弥陀如来の誓願を信ずれば釈迦仏は広大なすぐれた理解を持つ人と云われ、このような人を分陀利華（ふんだりけ）、「白い蓮華」と名付けるのであると申しています。

親鸞聖人が自著の「教行信証」の引用に「維摩経（ゆいまきよう）」というお経の一説を引かれていいます。そのお経に「高原の陸地（ろくち）には蓮華を生ぜず、卑湿（ひしつ）の淤泥（おでい）にすなわちこの華を生ずるが如し、〴〵煩惱の泥中にすなわち衆生ありて、よく佛法を起こ

すのみ」と書かれています。貴ばれる蓮の花は高原のすがすがしいところに見えるのではなくじめじめした泥沼にこそ蓮の華が咲くのです。つまりドロドロとした煩惱だらけの人間のなかにこそ、その煩惱具足の身を痛むころの上にこそ、佛法を聴いていこうと思いが、花咲くのですと教えられています。

また「阿弥陀経」の中に「池の中の蓮華、大きさ車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり。微妙香潔なり。」と書かれています。阿弥陀仏の仏国土に池があり大きな蓮の花が咲いていて、青い花は青く耀き、黄色い花は黄色に耀き、赤い花は赤く耀き、白い花は白く耀き、妙なる香を放っていますと云っています。一見浄土の莊嚴を説いているだけで、ともすると昔のインド人が考えた空想のように思う人もあるかと思えます。しか

しこれは、いのちそのものの世界を喻えたのではないのでしょうか。それぞれの蓮華は他の華の色を羨むわけではなく、いのち一杯生きて華を咲かせているということです。

私たち人間はすぐに他のものと比べ、優劣をはかってしまします。そんな生き方ではないのでしょうかという、お経からのメッセージです。S MAPの『世界に一つだけの花』という歌が聞こえてくるようですね。

他にも「法華経」の花は白蓮華ですし、本堂のお飾りの中にも多く蓮の華が使われていますように、仏教では大切にされる華なのです。



2015年6月27日撮影 中庭の蓮

作家 高史明 先生が
報恩講にいらっしゃいます



報恩講

十月二十八日（水）

法要開始午後一時

講演開始午後二時十五分

終了午後四時

講題「念仏者への道」

〴〵我が人生を語る〴〵

高先生とのご縁は、葉山にあります創作家具のお店「木」の親方にご紹介していただき始まりました。高先生は12歳の息子さんを自死で亡くされてから、『歎異抄』や親鸞に関する本を数多く執筆されています。高先生と親鸞聖人の出会い、高先生と西来寺との出会い。多くの縁により今回の講演が実現いたしました。本年の報恩講が皆様との新たなご縁に繋がることを願っております。

知 っていますか？

お念珠の持ち方 お焼香の仕方



お念珠の持ち方分かりますか？案外分からないですよ。テレビで有名な方々のお念珠の持ち方を目にすると思いますが、同じ宗派の方のほうでも随分間違えています。今回は一般的な一重のお念珠の持ち方を書かせて頂きます。

まずお念珠は左手で持ちます。そして合掌するときには輪に両手を通して、上から両方の親指で押さえます。そして房は下にします（二輪の念珠の場合には左手人差し指の上より下に垂らします）左手の手の位置はみぞおちのあたりで45度位の角度に合掌の手を傾けます。きちんとお念珠が持てて、合掌している姿はなんと



もいえずかつこいいものです。仏事には必ず用いるものですが、法事には持つてこれられない方もいらっしゃると思いますので、是非ご自分の念珠を忘れずにお持ちになってください。

また、最近では腕輪念珠という形のお念珠も多く出ていますが、これは普段左手首にはめるもので、合掌の時に両手の指先にはめるもので、五色腕輪念珠がありました。五色腕輪念珠がりましたが、五色というのには仏さまの身体を象徴としたもので、それぞれの色に意味があります。緑は毛髪の色で心乱れず穏やかな状態で力強く生き抜く、定根（じょうこん）・禅定（ぜんじょう）。黄色は身体の色で、豊かな姿で確固とした揺るぎない性質、金剛（こんごう）。赤は血液の色で、大いなる慈悲の心で人々を救済することが止まることのない、精進（しょうじん）。白は仏歯の色で、清らかな心で諸々の悪業や煩惱の苦しみを清める、清浄（しょうじょう）。紫は袈裟の色であらゆる侮辱や迫害、誘惑などによく耐えて怒らぬ、忍辱（にんにく）

を表します。また紫は多くの宗派で仏教の象徴として、仏旗や装飾品などの糸に使われています。



次に焼香の仕方ですが、その作法は各宗派によって作法が違いますので、今回は当派の仕方を紹介いたします。

まずは焼香卓の前に出て、ご本尊を仰ぎ見て軽く頭をさげます。次に香盒（香の入れ物）より香をつまんで2回焼香をします、この時、香をいただくことはしません、香盒の香をつまんだあとの香の乱れを右手でならし、合掌して静かに念仏を申します。なお、最後に焼香をされた方は、香炉と香盒のふたを閉じます。以上、お念珠の持ち方、焼香の仕方を申し上げましたが、是非、習慣として身につけてください。

報恩講では是非、 輪袈裟をお使いください！

西来寺報の中でも何度かお伝えしてきましたが、仏事や法事、お寺での行事などの際には輪袈裟をお使いください。

そもそも、袈裟は仏道修行の象徴で、それを身に着けることが仏弟子であることをあらわします。ですから、僧は仏事のときには袈裟を着ることになります。輪袈裟は、首から下げるだけの簡単なものですが、袈裟の簡易的なものとして、仏事の際の「正装」になります。使い方は簡単。普段着の上から、そのまま輪袈裟を身につけるだけです。

ちなみに「大袈裟」という言葉があります。これは僧の着ている袈裟からきています。本来、粗末な布で作っていた袈裟が、時代を経て儀式用に華美で装飾的なものになりました。その袈裟の大きさ、仰々しさから、現代使われるような意味になったといえます。

大袈裟にならず、簡単に正装になれる輪袈裟を是非お使いください。